



見えない努力を数値化しよう！

私の小さい頃のこと、子供向けテレビ番組のヒーローや怪獣の人形で遊び、部屋を散らかしたまましていると母親から「直ぐ片付けなさい。」と怒られました。「直ぐ」は、イライラのバロメーターでもあり、のらりくらり片付けていようものなら、全てのオモチャがゴミ箱に吸い込まれました。高校生になり、父親が書斎代わりに使用していた三畳ほどのスペースを自分の部屋として使えるようになった時、自由な空間を手に入れた喜びで毎日浮かれて過ごしていると、母親が「部屋を掃除しなさい！」と口癖のように私を攻め立てました。「その内、やるよ」なんて反論でもしてみようものなら、「その内、その内っていつやるの！」と怒りを買いました。仕方なく、床に転がっているカセットテープや雑誌を拾い、嫌々ながらに掃除機を持ち出して部屋中に堆積している埃を吸い取りました。今となれば、「直ぐ」や「その内」には、時間的な制約を意図していたことが十分理解できますが、当時は母親のせっかちな性格が災いしているとしか思えませんでした。

このような抽象的な表現での求めは、社会に出るとより具体的な数字となります。社長が「我が社の経営はどうなっている？」と社員へ尋ねた時、「はい、頑張ってます！」では、答えにはなりません。「目標売上は、昨年度比+10%、生産台数月50台です！」など、目標や努力の過程も数字に置き換えられ、結果と合わせて評価されます。子どもの頃ならまだしも、数字なしでは成り立たないのが、まさにビジネスと言えるでしょう。

あらためて皆さんの生活を振り返ってみてください。「朝早く起きしなさい。」「勉強しなさい。」「部活動で頑張るなさい。」と、起床時間、テストの点数、試合の勝敗や順位など、抽象的な言葉であっても数字で求められていることに気が付きます。とは言うものの「朝6時に起きました！」「テストで100点取りました！」「地区大会で第3位になりました！」と、数字で報告できることに越したことはありませんが、「頑張りました！」「全力を尽くしました！」と、結果よりも過程を意識した言葉で応えてるのではないのでしょうか。こうした定量的よりも定性的な表現で過ごす日常を考えると、社会で生きる厳しさとは、数字の呪縛から解放されないことなのかもしれません。

令和7年5月、特進特選コースでは、満点を取ることを目指す英単語テストを校長杯として実施しました。1000の単語を範囲に内100問が出題されます。全集中で臨んでいるであろうと想像はしていましたが、なんと百点満点の生徒が25名もいました。特に3年生が多かったことから、「1日60分、必ず20個の単語を覚える。」これまでの学習経験を生かし、数字で示した勉強計画を立てることで行動レベルを上げたのでしょうか。表彰式では、担任の「さすが3年生！」と、称賛の言葉に合わせて「**夢なき者に成功なし**」私の大好きな吉田松陰の名言が刻印されたボールペンを授与すると、結果だけではなく、見えない努力を評価されたことの自信が学びの匂いとなって、生徒の笑顔を誇らしげにしていました。

自ら考え行動するためには、ゴールだけではなく通過点の見える化がとても重要です。本テストでの目的を百点満点とした明確な設定は、勉強に費やす時間や行動過程の数値化を容易にしたのかもしれませんが、努力と結果の比例は、絶対ではありませんが、数値以上の経験値が生徒にとって大きな成果になると期待しています。

令和7年5月

